

カトマンズの Tripureshwor Mahadev 寺院の敷地内にあり、スダルシャンさんにバイクで連れて行ってもらった。Ram Prasad Kadel 氏が1995年、タンカ販売の収入を元手にして、民族楽器の収集に乗り出した。シャンカ（法螺貝）は8歳の頃に手にして以来、生活のなかに存在し続ける楽器のひとつ。2002年には博物館として一般公開がかない、現在では655種が収蔵されるに至る。ネパールの古き良き伝統を未来へつなごうといろいろなイベントも企画する。



Ram Prasad Kadel / ネパール民族楽器博物館設立者

ヤマハの web サイトより https://www.yamaha.com/ja/stories/033_01/



ネパール出身。1992年、大学卒業後、宗教画「タンカ」の制作・販売の事業を立ち上げる。その後、民族楽器博物館の設立を構想し、1995年に楽器の収集を開始。2002年に一般公開が実現し、現在は655種、1000点以上の楽器を収蔵している。博物館の運営と併せてフェスティバルも主催。自身はシャンカ（法螺貝）を吹く。

師匠に導かれた楽器収集の旅。

ネパールでは日常生活の中に、祖先から伝わる音楽が根付いています。幼い頃からそれら音楽に親しみ、宗教画を販売する事業のかたわらで、民族楽器の収集に乗り出したのが Ram Prasad Kadel 氏です。そこには「師匠」との運命的な出会いがありました。

原体験はおばあちゃんの歌。

ネパールの子どもが最初に触れる音楽は、おじいちゃん、おばあちゃんの歌です。私の場合、3、4歳の頃、おばあちゃんが膝の上に私を載せ、よく歌を歌ってくれました。それが音楽の原体験です。楽器で親しまれているのは、シャンカと呼ばれる法螺貝です。ネパールには一家にひとつはシャンカがあり、日の出と日の入り、毎日2回お祈りするときに吹かれます。私も8歳の頃にはシャンカを吹いていました。娯楽や教育のためというよりは、日常生活に音楽が根付いている感じです。私にとって音楽は、幼い頃からたいへん身近な存在でした。

現在の生業である、ヒンドゥー教徒らにはおなじみのタンカ（布に描かれた宗教画）を販売し始めたのは1992年。これは大学卒業直後に、宗教画を描ける友人たちとともに起こした事業です。タンカのことにはよく知っているつもりでしたが、仕事となるとさらなる知識が求められます。本からも勉強はしましたが、それだけでは限界があるものです。次第に、その宗教的な意義を直接教えてくれる人が必要だと考えるようになりました。

大学卒業の直後からタンカの販売をスタート。お店の壁には、たくさんのタンカが飾られている。国のためになることを。それが民族楽器の博物館のアイデアに。

ある日のこと、私にタンカの意義を教えてくれる「師匠」となる方に会いに行きます。巷でグル（導師）として知られていた人です。「あなたがグルですよね？」と尋ねると、「グルではない。ただ、教えてほしいという人が来たら拒まないだけだ」と言います。その日から3カ月間、朝4時に師匠のもとへ通う生活を続けたところ「弟子と認める」と言ってもらえました。師匠からは、いかに心の平安を得るかを学びます。そのためにはシンプルライフ、地道に過ごすことが大事です。「自分はすごい」などと、おごってはいけません。謙虚な気持ちで穏やかな生活を送る。すると自ずと進むべき道が見えてきます。

師匠からは「何か尊いことをしなさい」といわれました。具体的にこうしなさいと命ぜられたわけではありません。私はまず、国のためになることをしようと考えました。では、国のために何をすべきか。熟慮を重ねていたところ、民族楽器の博物館のアイデアが舞い降りてきたのです。ネパールには地域ごとに100ほどの民族がいます。それぞれで音楽のスタイルが異なり、楽器もさまざま。それらは祖先が残してくれた貴重な財産です。楽器を収集・保存し、ネパールの多様な音楽文化を受け継いでいく。それは国の伝統を守ることに繋がります。



ネパール民俗楽器博物館。

ネパールの首都、カトマンズにある *Tripureshwor Mahadev* 寺院の敷地内にある。

楽器収集は、持ち主との関係づくりに始まる。

この構想を師匠に伝えると、「決して簡単なことではない」「道は険しいけれど、それでもいいのか？」と念を押されましたが、迷いはありませんでした。こうして1995年、タンカ販売の収入を元手にして、民族楽器の収集に乗り出します。はじめのステップは所有者のもとに出向き、楽器にまつわる話を聞き出すこと。その楽器にどんな歴史があるのか。作られた時期は。製作方法は。どんな人が弾いてきたか。ほかにも幅広く情報を集めます。

そもそも「どこに、どんな楽器が」あるのかという情報が向こうからやってくることは滅多にありません。可能な限り自分で調べ、自ら探し回ります。それに、どこにあるかわかったところで、よそ者の私がいきなり訪問しても、誰も相手にはしてくれません。バスでその地域に向かっても、中心地からは目的地までは自分の足で歩きます。ジープなんかで押し入ったら訝しがられますからね（笑）。誰から譲ってもらう場合もまずは関係づくりから。相手は先生。自分はいくまで生徒。そういう気持ちで教を乞います。そうすると少しずつ「仲間」と認めてくれるようになる。楽器を受け継ぐのはその先の話です。



シャンカ（法螺貝）は8歳の頃に手にして以来、生活のなかに存在し続ける楽器のひとつ。数多くの楽器を収集した今となっても、楽器に触れるよろこびを忘れることはない。

楽器へのリスペクトが詰まった博物館。

師匠に導かれるように、民族楽器の収集を始めた Ram Prasad Kadel 氏。地道な活動により、2002年には博物館として一般公開がかない、現在では655種が収蔵されるに至ります。ネパールの古き良き伝統を、未来へつなごうとする氏の思いに迫ります。

楽器にまつわるストーリーを記録するという責務。

私には楽器を収集するにあたってのポリシーがあります。今そこで使われている楽器は対象外とすることです。使われているということは、その村に必要なものだからです。譲り受ける楽器は大きく分けて2種類。ひとつは古くてボロボロであっても、修理すれば使えるもの。もうひとつは完全に一から新しく作ってくれたもの。多くの楽器は代々受け継がれてきたものですから、持ち主への敬意が欠かせません。相手に失礼のないよう、その村の歴史や文化を丹念に調べた上でコンタクトをとります。

多くの持ち主はご高齢で、彼らしか知らないことがたくさんあるものです。彼らから楽器にまつわるストーリーを伺って、なんらかの記録を残すことは、私の責務だと思っています。しか

し、それをいかに引き出すのかは難題です。足しげく通い、ていねいにヒアリングを続けるうちに、向こうから「思い出したのだけど」と連絡をいただくこともありました。民族楽器にまつわる話は口承が多く、文字化されていません。基本は対面での聞き取りです。つまるところ人間関係が非常に大切となってきます。

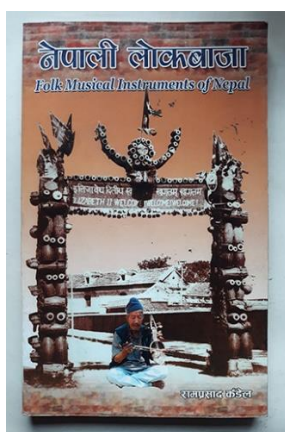


古びた Tamaura と Kathajhaal (写真左) と、新たに作られた Indra Dhol (右)。コレクションの対象となるのは「今使われている楽器」以外のもので、多くは補修すれば使えるものか、新品のものとなる。

ネパールの民族音楽全体を継承するために。

コレクションが進むにつれて、私の知識も着実に増え、視野が広がりました。たいていの楽器が、樹皮や動物の骨といった身近なところで調達できる材料だけで作られていることには感銘を受けたものです。また、ネパール各地の音楽は、地形の影響を受けていることにも驚きました。平地では、人々が動きやすく活動的だからか、ピッチが高くテンポが速い音楽が多い。丘陵地帯や山頂の村では逆です。寒さのせいもあるのでしょう、人に寄り添ってくれるような温かくスローな音楽が多い傾向が見受けられます。

音源が残されていない楽器の音は、レコーディングする場合があります。そうすれば後々、音源を聞いた上で、実際に楽器を弾くことが容易になるからです。これも文化を継承のためには欠かせない作業です。ネパールでは 1950 年に新しい教育制度が始まりました。そこには良い面もありましたが、古き良き音楽文化が切り捨てられてしまう側面があったのも事実です。それを復興させたい。ただ楽器を集めておしまいではありません。ネパールの民族音楽全体を記録し、継承しようと努めているのです。



ネパールの民族楽器、375点の情報を一冊にまとめた書籍。
これも文化の継承には欠かせない仕事のうち。

音楽で、みんなを、世界を、ひとつにしたい。

2002年に博物館として一般公開を開始し、2007年に現在の場所に移転しました。1,300種を超えるネパールの楽器のうち655種、1000点超が集まりましたが、まだまだ道半ばです。演奏法の分類なども進めて、博物館のクオリティをもっと向上させたい。当面の目標は、国内の楽器を網羅することです。それに目途がつけば、インド、スリランカなど南アジアまで範囲を広げたい。南アジア各国は文化や宗教に関して共通する部分が多い一方、歴史は異なっています。それらを比較すると、興味深い展示になるでしょうからね。

ちなみに、私は音楽とは人間そのものだと考えています。たとえば、手拍子も心臓の鼓動もリズムを打っていますよね。歌えばメロディになる。私たち自身が楽器のように音楽を奏でています。人間同士のコミュニケーションは、いわばアンサンブルのようなもの。人類はひとつの壮大なシンフォニーです。博物館主催で、2011年から毎年1回、ミュージシャンやダンサーを招いたフェスティバルを開催しているのも「音楽はみんなをひとつにするものだ」という思いからです。私の取り組みによって、ネパールを、南アジアを、そして世界がひとつなれば、とても幸せです。



博物館の一角に集まった次世代からの質問に応える。
ネパールの音楽文化を継承する活動は、さまざまな形で行われている。